oguz (Neun Stämme として特に《 》の中に收めたるが、思ふに此の語を以て、此の引用文の初頭に見ゆるが如く Toguz Oguz に對せしめたるなり）と Uigur との相互の關係に就きては、現存史料に於て何等充分なる證明の存せざるにもせよ、兩者の同族なりしことは確かなり、九〔姓〕タヽール (Tokuz Tatar, Radloff, Altt. Inschr., Neue Folge, p. 142: "Da vereinigte sich das Oguz-Volk mit den Toguz-Tatar und kam herbei") なるものは多分 Toguz-Oguz に對する別名[5]にして、而して Oguz はそれ丈けにて Uigur に對する同義として相當し得たりしものならん、唐書に見ゆる漢字譯名に就きて判斷せんに、Uigur を意味する回鶻・回紇と共に、烏紇 (wu-ho, 廣東音は u-hāt 厦門音は o-gut) なる形あり、此の形はかの結骨 (kié-ku 廣東音は kit-kwat) を Kirkiz、阿婆羅拔 (A-p'o-lo-pat) を Abu'l-Abbas の音寫なりと認むると同様に正しく Oguz 或は Ogus を寫せるものと見ざる可らず、何となれば語尾の t 音は只だ r l のみならず、また齒音をも寫し得るを以てなり。

Oguz なる名によりて、九姓中の名目に見えざるものにして、然も Uigur に類せる民族が表はさるゝ證據としては、Karluk の例を擧げ得べし、此の部族は Uigur 種にはあらずして、只だ之に征服せられたるものとして數へらるゝものなるが、唐書の記事によれば突厥の系統に屬し（葛邏祿本突厥諸族）Altai 山の西に住し、三姓に分れたり……突厥碑文には、（默棘連可汗碑 Radloff, Altt. Inschr., Neue Folge, p. 141）Karluk はその本名の外に一度全く唐書と同様に Ütsch-Oguz（三〔姓〕Oguz）と稱せらる、此の名は唐書に開元三年四月庚申突厥部三姓葛邏祿來附と記せる三姓葛邏祿なる漢名にのみ對照し得べきものなりとす